



カイルーグイ  
台湾の開路鬼

《小坡の誕生日》 老舎

## (八) 学校をさぼる

先生はちょうど算数を教えているところだった。片手にむち、片手にチョークを持ち、黒板にささっと二つの**7**を書き、それから咳払いをし、むちで黒板をたたきながら大きな声で言った。

「小英！ <sup>シャオイン</sup>七七はいくつだ？」

小英は立ち上がった。両足が震えているようで、下を向いて机の上の紙の船を見ながらずっと黙っていた。

「言いなさい！」

先生はまた大きな声を出した。

小英は、だれか手まねで教えてくれる者はいないかと目をきよろきよろさせた

が、みんなは何か重要なことでも考えているように、下を向いたままだった。

「言いなさい！」先生のむちが机の上で何度か響いた。<sup>チャントウズ</sup>張禿子が後ろから小さな声で言った。「七七は二つの七」

<sup>シャオイン</sup>小英は下を向いたまま言った。「七七は二つの七」

「何？」先生にはよく聞こえなかったようだ。

「七七は二つの七です」と言うと、小英は力が抜けたようにいすに座った。そして座ってから付け加えた。「張禿子が言ったんです！」

「何だって？ 張禿子が？」

先生はこの場をどう処理したらいいか一瞬わからなかったが、張禿子、というのが聞こえたので、即座に「張禿子」が頭に浮かんできて言った。「張禿子！七七はいくつだ。言いなさい、はやく」

「ぼくに聞かないでください。7のかたちが大嫌いなんです。一の字が横にいつて曲がってて、かっこ悪い！」

張禿子は胸を張って答えた。先生が黒板の7の字をよく見ると、確かにかっこうはよくない。<sup>シャオポー</sup>小坡は張禿子に拍手を送った。拍手の音はよく響いた。

「だれだ。だれが拍手したんだ？」先生はみんなをにらみつけて、むちで机をたたいた。みんなは小坡が好きだったので、だれも漏らさなかった。しかし<sup>シャオポー</sup>小坡は自分から立ち上がった。「ぼくが拍手しました。セーン」  
彼はいつも「先生」とは呼ばずに「先」を長くのばして呼んでいた。

「お前か。どうしてだ」先生は大きな声で言った。

「7はほんとうにかっこうが悪いです。8はとってもきれいです。小さな丸い玉が二つあるみたいで、ひょうたんにも似てて、小さな丸いキャンディーがくっついていて見えないようにも見えます」

小坡が言い終わらないうちに、みんなが一斉に叫んだ。

「みんなキャンディー大好き！」

「七七はいくつかと聞いているんだ！」

先生が力を入れすぎてたたいたので、むちがひと節折れた。

「言ったでしょう、**7**の字はかっこ悪いんです、うまく言えないけど。二八、十六。四八、四十八。五八……」

「七七はいくつかと聞いているんだ。だれが『八掛ける』を言えと言った」

先生はいらいらして、チョークの先をつまんで取ると口に入れ、くちやくちやくかんで食べてしまった。食べ終わると、やけになって教卓に座り、口の中でぶつぶつと言った。

「教えない、教えない、もうだめだ、もうだめだ」

「二八、十六。四八、四十八。五八……」

小坡<sup>シヤオポー</sup>は言い続けた。みんなはカタカタ音を立てながら、石板の上に**8**の字を書いた。小坡は大きな**8**を石板の上に書き、石板を横にしてみんなに見せた。「ほら、**8**を横にして見るとメガネに見えるよ」

みんなはさっと石板を横にして目の前にかかげた。

「ほんとうにメガネみたいだ！」

「メガネをかけるとよけいに見えない」と張禿子<sup>チャントウズ</sup>は**8**の書かれた石板を鼻のまえに持ってきた。

「**9**もおもしろいよ。ひっくり返すと**6**になる」

小坡は石板に**9**を書き、石板をさかさまにした。「変わった！ **6**だ！」

みんなは急いで**9**を書いて急いで石板をひっくり返した。いっせいに叫んだ。「変わった！」何人かが急ぎすぎたので、石板を机に落としてガチャンと音をたてた。

先生はもうみんなのことにかまわなかった。立ちあがってまたチョークを食べ、口を動かしながら黒板に背を向け、ゆっくりと眠ってしまった。

みんなはそれを見ると立ち上がり、目を閉じると、何人かはなんと立ったまま眠り、何人かは目を閉じてゆっくり座り、机の上に腹ばいになって寝た。張禿子は眠りたくなくてずっと目を開けていたが、とつぜん大きないびきをかきはじめて眠った。

小坡はしばらく立っていたが、こっそりと外に出ていった。歩きながらぶつぶつ言った。「みんなは**8**が好きなのに、先生はわざと**7**のことを聞く。ものわかりが悪いな。先生のお母さんに言いつけて、しかってもらおうぞ！」

ジャオボー  
小坡はほんとうは先生たちが好きだったが、いつも先生たちとは意見が合わなかった。小坡は**8**が好きなのに、先生はわざと**7**のことを聞く。小坡は歌いたいののに、先生はわざと国語を教える。だれも調停してくれるものはいない。困ったもんだ。

学校の外に出ると、小坡は算数の問題のことをすっかり忘れた。心の中で、何をしにいけないかと考えていた。いい考えが思い浮かばなかった。そうだ、大通りに行こう。どこでもいい、行けるところに行こう。小坡は歩きながらも手足で何かしらやっている。道路には果物の皮や紙くずが落ちていて、それをサッカーのボールのように蹴って下水溝に入れた。小さな足のおばあさんが踏んだりしたら、ひっくり返るかもしれないじゃないか。時には、足の指を使って道の上の小さな泥の塊を挟んだりした。このごろ、足の指の訓練をして動きが良くなってはいるが、足の指は短か過ぎて足の指ではしをはさんでご飯を食べるのはできないのが、残念だ。西洋雑貨の店の外につり下げてあるボールはとってもかわいい。きね杵でたたくと、ボールは左右に長いあいだ揺れている。学校の大時計の振り子みたいだ。もし振り子がボールだったらいいのにな。いつもボールをけりたいたときに蹴って、けり終わったら時計にもどしておく。一石二鳥だ！

ここは少し不思議な場所だ。いつもこのお茶屋さんを見るたびに思い出すことがある。「ああ、ダーボー大坡兄ちゃんはきつとここで母さんに拾われたにちがいない！この大通りにはあちこちに溝があるので、理由はわからないが、小坡にはここが兄さんが拾われた所のように思えるのだった。小坡は赤ちゃんが溝に寝ているかもしれないと思ってのぞいてよく見た。いなかった。だが小さな蛙がいた。体を丸くしていったい何をしているのだろう。「あ、きつと兄ちゃんがこの蛙に変身したのにちがいない。蛙ちゃん、上がっておいで！連れていってお母さんに会わせてあげるから」

シャオポー

小坡は溝の上にひざまずいて蛙に向かって頭をこくりと動かしながらいった。だが水がざっと流れてきて、蛙も流れて行ってしまった。残念！

ドン、ドン、ドン！ 遠くから太鼓の音が聞こえてきた。「あ、結婚式の行列じゃなかったら葬式行列だ！ 葬式行列だったらいい。とってもにぎやかだから！ 小坡は首を伸ばして遠くを見た。ひょっとしたら葬式行列じゃないかもしれないなど、胸をドキドキさせながら見ていた。葬式行列じゃなくて「<sup>チュウグアン</sup>出棺」はよくない。出棺のときはみんなが車を使っていて、ぼっとして見ているあいだに過ぎ去っていくからちっとも面白くないのだ。小坡が見たいのは前のほうが「<sup>チーガンジーシ</sup>旗竿執事①」で、後ろのほうでみんなが白い布で車を引っ張っていく葬式行列なのだ。そっちのほうがずっと面白い。それに旗竿執事のない出棺のほうはみんなが泣きはらした目をしていて、赤い目をしたばあやを見ているみたいで、見ているほうも<sup>つら</sup>辛くなる。旗竿執事のある行列は通りをゆっくり歩いていき、みんなはにこにこして、まるで、世の中でいちばん楽しいのは死人を担いで街を歩くことみたいだ。これがとっても面白い。

「ああ、神様、絶対来ますように！」小坡は首を伸ばして心の中で祈った。

ドン、ドン、ドン、ドン！ 楽隊は一つだけじゃないぞ。ジャカ、ジャカ、ジャカ。中国の楽士隊がいる！ なかなかやってこないのは、きっとゆっくり歩いているからに違いない。

すごいぞ。あの大きな<sup>カイルーグイ</sup>開路鬼②を見ろよ！ 背の高さは一丈〔約3.3メートル〕もあり血のような真っ赤な大きな顔。目は包子ぐらい大きくて、左右上下に動かせる。大きな黒いひげ、金のよろいに赤いマント、足にはタイヤを巻いている！ 何人もの子供たちが緑色の絹の上着とズボンをはいて、貝殻の形をした麦わら帽子をかぶり、この目立ちたがり屋だけど自分では歩けない開路鬼を引いている。小坡はこの子供たちを見てうらやましくて仕方がなかった。ああ、ぼくもあの大きな鬼を引いていけたら、どんなに面白いことか！

開路鬼のあとに、とても痩せてとても汚れた人たちの列が続き、みんな大きな紙灯籠を両手で頭の上に持ち上げていた。灯芯を<sup>こうまし</sup>黄麻紙③がほやのように囲って

いる。<sup>シャオボー</sup>小坡はこの人たちがかわいそうになった。痩せたおじいさんはいまにも大きな灯に押しつぶされそうだった。

この瘦灯鬼のあとに車があって、その上に何人かが座っていた。ラッパを吹いている人やドラをたたいている人がいて、太鼓をたたいている人もいた。ラッパを吹いている人は、ほっぺたをふくらませたりへこませたりして、まるでぴかぴかに光っているひょうたんのようだった。ドラの人は上半身を車からのり出して、笑いながら、得意げなようすでドラをたたいていた。小坡は車の上に飛び乗って、自分もドンドンとドラをたたいてみたくてしかたなかった。

車の後ろにたくさんの人がいた。一人一人が絹の布地の巻いたものがかついていた。ピンク色の生地や薄い黄色の生地、濃い青色や青ネギのような色で、すべての生地の上に金で字が書いてあった。黒いフェルトで字を切って貼り付けたあるのもあった。そのほか、長い白い生地もあり、書いてある字の数は多かった。

小坡は、これらの布地を何に使うのか、考えつかなかった。それに、見てもちっとも面白くなかった。大きなきれいな絹を持って街中をまわっているなんてむだなことだ。黒板に書いた「7」とか、二匹のウサギを書いたのを持ったほうが、これよりは安上がりだ！ 小坡は彼らの代わりにアイデアを出してやった。

待てよ、この人たちは<sup>きじ</sup>生地屋さんの宣伝隊かもしれないな？ そうだ、映画館とかタバコ屋は、背中に広告を背負った人にいつも街じゅうを回ってもらっているじゃないか。生地屋も同じことをしているのではあるまいか？ 小坡、お前ばかだな。小坡は絹の代わりに黒板を使えばいいとアイデアを出したことを後悔した。

ああ、終わった。絹地の部隊が行ってしまった！ 次に来たのは楽隊の車だ。みんなインド人だ。みんな白い上着に白いズボンで、赤いたすきを斜めにかけている。たすきには中国語の字が刺繍してある。小坡は何と書いてあるのかわからなかったので、インド人に聞きにいった。インド人は頭を振った。おそらく彼も知らなかったのだろう。

「字を知らないで、どうしてラッパが吹けるの？」

インド人たちは小<sup>シャオボー</sup>坡を無視し、ただトランペットを手にして、頭を上げて空を見ていた。

車の後ろに白い旗を振っている人がいて、襟もとに花と赤い細長い布切れを付けていた。いったい何をしているのか小坡にはわからなかった。ただ、その人が旗を振るたびに、前に行く絹地の部隊の人たちが、担いでいる生地をまっすぐに伸ばすのは分かった。まるでみんなの目が後ろにあってその人を見ることができるようだった。ときどきその人はわめき散らし、それも大きな声で派手にわめいていたが、前の絹地の部隊の人たちは何も言い返そうとしなかった。小坡は心の中で思った。この人はきっと生地屋の主人にちがいない。そうでなければこんなにいばっているはずがない。

後ろにまた屋根のない車がきていて、年をとった和尚<sup>おしょう</sup>さんが目を閉じてじっと座っていた。小坡は心の中で言った。この人がきっと死んだ人にちがいない！ずっと見ていると、この和尚さんは手を動かしてみかんを口に入れた。小坡には、この人は死人ではなく、死んだふりをしているのだとわかった。彼は車のそばに近寄って尋ねた。

「みかんは酸っぱくなかったですか？」

和尚さんはあいかわらずじっとしたままだった。小坡は車の前に二人の子供のお坊さんがいたのに気がつかなかった。

二人とも坊主頭で帽子をかぶっていなかった。頭は日に照らされ汗びっしょりになっていた。彼らは手を合わせて拝んでいたが、声を合わせて「シッ」と小坡に言った。小坡は彼らをにらみつけて言った。「運動場の後ろで会おうぜ！」

子供のお坊さんはずっと拝んでいて、頭の上からだらだら汗を流していた。

この車の後に、もう一台和尚さんの乗った車が来ていて、みんな黒い帽子をかぶり青い僧服を来ていた。服にはたくさんのポケットが付いていた。ふつうの洋服みたいだった。彼らはみんな口の中でぶつぶつ言っていた。本を暗記しているようだった。小坡は、前の車に乗っている年をとった和尚さんは先生に違いない、

目を閉じて彼らが暗記しているのを聞いているのだ、と思った。もし覚え間違いをしたら、彼らが叩かれるかどうかはわからない。

暗記をしている和尚さんたちの乗った車の後ろにも、大きな車が来ていて、やまのような蒲葵扇<sup>ピロウせん</sup>④と氷水の入った桶、大小の紙包み（たぶん点心だろう）を運んでいた。傘よりも大きなわら帽子をかぶった人が水桶をかついで車のそばに来て、みんなに水を飲ませていた。小坡<sup>シャオボー</sup>はその車に近寄って背伸びをして中を見た。「あっ、レモン水のびんがいっぱいある」

「うちわを一つ取っていいぞ」と、車を運転している人が言った。小坡は自分の前と後ろを見た。人はいない。これは彼が自分に向かって言ってくれたのだ。それで蒲葵扇を取り頭にかざした。そしてまた車といっしょに歩き始めた。二人の水運び人がまた水を汲みにきた。小坡は水を飲ませてくれと話しかけた。彼らもお金をとらなかった。ああ、気持ちがいい。氷水を飲み、頭には日差しをさえぎる蒲葵扇がある。これはほんとうにいい。毎日葬式行列に出会えれば毎日ただで氷水が飲めるじゃないか。レモン水ももらえるかもしれない。ずっと車と一緒に歩いていくと運転手がまた「取っていいぞ」と言って蒲葵扇をくれるかもしれない、と思った。そしたら妹にあげられる。だが運転手はもう何も言わなかった。後ろからドンドンという音が聞こえてきた。どうしようもなくなって、脇によけるしかなかった。それから、して後ろにはどんな面白いことがあるのかと見物しはじめた。

あれ、またインド人の車だ。みんな白い上着、赤いスカート、はでな帽子をかぶっている。すごい。もう一台来た。すごい。もう一台。三台の車に乗ったインド人が一斉にラッパを吹いたり太鼓をたたき始めた。でもみんな自分の好きなようにやってお互いに気にしていないようで、ものすごくにぎやかだけど、どうしても音楽には聞こえない。

三台のインド人の乗った車のあとから、二列に並んだ黄色の絹の衣装を着た子供たちがいた。一人一人が紙でできた人を持っていた。紙でできた人の服はとてもきれいだっただが、残念なことに、顔が白すぎて、頭が前後左右に大きく揺れ

ている。<sup>シャオポー</sup>小坡も頭を回そうとしたが、どうやっても顔を後ろに向けることができなかった。手を使って力を入れてもうまくいかない。もうやめよう。顔を後ろに回して万が一もとに戻せなかったら、歩くときにとっても大変だ。

紙でできた人たちの部隊のあとはさらに面白かった。子供たちが鬼の面をかぶって飛び跳ねながらきていた。中の一人が一生懸命飛び跳ねていて、不注意でバナナの皮を踏んで前のめりになり、ばたっと地面にはいつくばってしまった。鬼の面の鼻がつぶれた。そうか、鬼の面をかぶっているほうが良いんだ。自分の鼻がつぶれるのを防げる。

また大きな車だ。上には松亭<sup>ソントン</sup>㊦があり花輪がいっぱい掛けてある。本物の花もあるし紙で作った花もある。小坡は腑に落ちなかった。この花輪は何のためにあるんだろう。花の囲いの真ん中には大きな写真があった。色の黒い歯の無いお婆さんの写真だ。小坡はさらにわからなくなった。この写真が葬式と何の関係があるんだろう。それを出してみんなで見るのか？ ちっともきれいじゃないよ！ わからないな。死んだ人のことはどうせ生きている人とは同じじゃないんだから、かまうことはない。見ていよう！

ああ、とってもおもしろい。七、八十韻。少なくとも七、八十人はいる。みんな黒いズボンをはいて、はだしだ。みんなは白い長い布を持って、とっても大きな車を引いている。インド人のおじいさんがその車を運転している。でもみんなは車を引いているふりをしているんだ。小坡は笑いだした。もしインド人の運転手がいたずらして、とつぜんスピードを上げて車を走らせたら、黒いズボンをはいた人たちはみんな転んでしまうんじゃないだろうか。ちょうどぼくたちが庭で汽車ごっこをして遊んでいたときに転んだみたいに。なんて面白いんだ。小坡は足をふんばって、インド人の運転手に手まねをして低い声で頼んだ。「急いで！急いで前に走らせて！」

インド人の運転手はスピードを出さなかった。

「分からず屋！」

車の上にカラフルなあずまや風の小さな建物があり、その中に細長い長方形の

ものが置いてあった。赤い絹の布で覆われていて、いったいそれが何なのかはわからなかった。あずまや風の建物の上にはカラフルな服を着た子供が二人立っていて、何も頭にかぶっていないので日に照らされてほとんど死にそうだった。小坡は心の中で思った。おそらくこの二人の子供が死人なのだ。まだ死んではいないけれど、行列が街の外に出るころにちょうど死ぬのだ。何てかわいそうなんだろう！

車の後ろにいる四、五人は麻の服、麻の帽子、麻の靴で、全部が車を押しているふりをしている。彼らはみんな下を向いているが、ぜったいにお互いに笑いながら話しているにちがいない。こんなふうにして車を押すのをとてもおもしろがっているようだ。彼らの麻の服は林老板<sup>リンラオバン</sup>〔二章に登場。父親の国産品商店の隣の外国製品商店の主人〕の夏のシャツのように裾が長い。でも、中には白い粗い麻織りの服を着ている。一人の若い人が赤いネクタイをしているのが、麻の服の丸い大きな襟から見えていた。

これらの群の後には、車や馬車がなんていっばいなんだ。一台のあとに一台と次々に続いて、ずっと終わりが無い。車の中には若いお姉さんたち、奥さんたち、おばあさんたち、女の子たちが座っていて、みんな麻の服を着ている。洋服を着ている人もいるし、まげを結っている人もいるし、短い髪の人もある。目を赤くしている人もいるし、笑いながら話している人もいる。たばこを吸っている人もいるし、種を食べている人もいる。女の子たちはみんな飴や果物を食べ、道路は皮でいっばいだ。ああ、なんてにぎやかなんだ。

小坡<sup>シャオポー</sup>はいっしょに歩きながら、ときには前に出てインド人がラッパを吹いているのを見たり、後ろに走って行って子供の鬼が飛び跳ねているのを見た。見ればみるほど面白くなって、学校に戻りたくなかった！ 戻ろうかな？ もう少し見よう。戻らなくちゃいけない。でも、インド人のおじいさんがまた吹きはじめた！

歩きながら、突然気が付いた。もうすぐ小坡<sup>シャオポー</sup>〔地名〕だ！ しまった、万が一父さんに見られたらとんでもないことになるぞ！ 父さんはきっと店の外にいて、

にぎやかなのを見ているにちがいない。そうに決まってる。早く帰ろう！ 待て待て。みんなが行ってしまうのを待って、しばらくしてから帰ろう」

<sup>ビロウせん</sup>  
蒲葵扇を持って道のわきに立って、隊列がひとつずつ通りすぎていくのをまち、<sup>シャオボー</sup>  
小坡はやっとなごりおしそうにしながら、帰っていった。

「結局、死んだ人はどこに入れられているのか、わからなかったな」

彼はうつむいて考えた。「楽隊の車の中に隠しているはずはないよな！ あの年とった和尚さんじゃなかったのか！ いったいどこにいたんだろう？ 開路鬼の体の中かもしれない？ わからないな！」

「何てったって葬式行列がいちばんにぎやかだ。家に帰ったら南星たちのところに行っていっしょに葬式行列ごっこをやろう。それがいい！」

- ①旗竿執事……幟を掲げたりお経を唱えながら野辺送りの葬列の先導をする一種の儀仗（執事）。
- ②開路鬼……葬列の先導役をする大型の紙製人形。開路神とも呼ばれる。
- ③黄麻紙……シナノキ科の落葉草木を原料として漉いた紙。
- ④蒲葵扇……ヤシ科の常緑高木である蒲葵の葉を漂白して作られるうちわ。
- ⑤松亭……葬列の車や輿の上に載せられている、あずまやに模した作りのもので、中に故人の遺影が置かれている。



蒲葵



蒲葵扇（ビロウせん）



大家都爱小坡，没有人给他泄漏。可是小坡自己站起来了：“我鼓掌来着。先——！”他向来不叫“先生”，只是把“先”字拉长一点。

“你？为什么？”先生喊。

“‘7’是真不好看嘛！‘8’字有多么美：又像一对小环，又像一个小葫芦，又像两个小糖球粘到了一块儿。”

小坡还没说完，大家齐喊：

“我们爱吃糖球！”

“七七是多少，我问你！”先生用力过猛，把教鞭敲断了一节儿。

“没告诉你吗，先——！‘7’字不顺眼，说不上来。二八一十六，四八四十八，五八——”

“我问你七七是多少，谁叫你说八！”先生一着急，捏起个粉笔头儿，扔在嘴里，咬了咬，吃下去了。吃完粉笔头，赌气坐在讲桌上，不住地叨唠：

“不教了！不教了！气死！气死！”

“二八一十六，四八四十八，五八——”小坡继续着念。

大家唏里哗啦，一齐在石板上画“8”。

小坡画了个大“8”，然后把石板横过来，给大家看：“对了，‘8’字横着看，还可以当眼镜儿。”

大家忙着全把石板横过来，举在面前：“真像眼镜！”

“戴上眼镜更看不真了！”张秃子把画着“8”的石板放在鼻子前面。

“‘9’也很好玩，一翻儿就变成‘6’。”小坡在石板上画了个“9”，然后把石板倒拿：“变！是‘6’不是？”

大家全赶快画“9”，赶快翻石板，一声呐喊：“变！”有几个太慌了，把石板哗嚓嚓摔在桌子上。

先生没有管他们，立起来，又吃了一个粉笔头。嘴儿动着，背靠黑板，慢慢地睡去。

大家一看，全站起来，把眼闭上。有的居然站着睡去，有的闭着眼慢慢坐下，趴在桌上睡。张秃子不肯睡。依旧睁着眼睛，可是忽然很响地打起呼来。

小坡站了一会儿，轻手蹑脚地往外走。一边走，一边叨唠：

“大家爱‘8’，你偏问‘7’，不知好歹！找你妈去，叫她打你一顿！”

小坡本来是很爱先生的，可是他们的意见老不相合。他爱“8”，先生偏问“7”，他要唱歌，先生偏教国语。谁也没法儿给他们调停调停，真糟！

走到校外，小坡把这算术问题完全忘掉。心中算计着，干什么去好呢。想不出主意来，好吧，顺着大街走吧，走到哪儿算哪儿。

一边走，一边手脚“不识闲儿”，地上有什么果子皮、烂纸，全像踢足球似的踢到水沟里去！恐怕叫小脚儿老太太踩上，跌个脚朝天。有的时候也试用脚指夹地上的小泥块什么的。近来脚指练得颇灵动，可惜脚指太短了一些，不然颇可以用脚拿筷子吃饭。洋货店门外挂着的皮球也十分可爱，用手杵了一下，球儿左右摆动了半天，很像学校大钟的钟摆，假如把皮球当钟摆多么好，随时拿下来踢一回，踢完再挂上去，岂不是“一搭两用”吗！钟里为什么要摆呢？不明白！不用问先生去，一问他钟摆是干什么的，他一定说：七七是多少？哎呀，还有小乒乓球，洋娃娃，口琴儿等等！可惜都在玻璃柜里，不能摸一摸，只好趴在玻璃盖儿上看着，嘴中叨唠：有钱的时候，买这个口琴！不，还是乒乓球好，没事儿和妹妹打一回，准把妹妹赢了，可是也不要赢太多了，妹妹脸皮儿薄，输多了就哭。还是长大了开个洋货店吧！什么东西都有：小球儿，各种的小球儿；口琴儿，一大堆；粉笔，各种颜色

的；油条，炸得又焦又长。可是全不卖，自己和妹妹整天拿着玩，这够多么有趣，也许把南星找来一块儿玩耍，南星啊，一定光吃油条，不干别的！

旁边的鸡鸭店挂着许多板鸭，小烧猪，腊肠儿，唉，不要去摸，把烧猪摸脏了，人家还怎么吃！“小坡到处讲公德，是不是？”他自己问自己。“公德两个字怎么写来着？”……“又忘了！”……“想起来了！”……“哼，又忘了！”

慢慢地走到大马路。有一家茶叶铺是小坡最喜爱的。小徒弟们在柜台前挑拣茶叶，东一拱箬，西一竹篓，清香得非常好闻。玻璃柜中的茶叶筒儿也很美丽，方的，圆的，六棱儿的，都贴着很花俏的纸，纸上还画着花儿和小人什么的。小坡每逢走到这里，一定至少要站十来分钟。

这是个还有点奇怪的地方，每逢看见这个茶叶店，便想起：啊，哥哥大坡一定是在这里被妈妈捡去的！这条大街处处有水沟，不知道为何只有此处像是捡哥哥的地方。他往水沟里看了看，也许又有小孩在那里躺着。没有，可是有个小青蛙，团着身儿不知干什么玩呢。“啊，大概哥哥也是小青蛙变的！小蛙，上这儿来，我带你看妈妈去！”小坡蹲在沟边上向小蛙点头。来了一股清水，把小青蛙冲走了，可惜！

咚，咚，咚，咚，由远处来了一阵鼓声。啊！不是娶新娘，便是送殡的！顶好是送殡的，那才热闹！小坡伸着脖子往远处看，心中噗咚噗咚地直跳，唯恐不是送葬的。而且就是出殡，也还不行，因为送殡的有时完全用汽车，忽——，一展眼儿就跑过去，有什么好看！小坡要看的是前有旗伞执事，后有大家用白布条拉着的汽车，那才有意思。况且没有旗伞的出殡的，人们全哭得红眼妈似的，看着怪难过。有旗伞执事在街上慢慢走的呢，人人嘻皮笑脸的，好似天下最可乐的事就是把死人抬着满街走。那才有意思！

“哎呀，好天爷！千万来个有旗伞执事的！”小坡还伸着脖子，心中这样祷告。

咚，咚，咚，咚，不是一班乐队呀，还有“噉擦”、“噉擦”的中国吹鼓手呢！这半天还不过来，一定是慢慢走的！

等不得了，往前迎上去。小坡疯了似的，撒腿就跑，一气跑出很远。

可了不得，看，那个大开路鬼哟！一丈多高，血红的大脸，眼珠儿有肉包子大小，还会乱动！大黑胡子，金甲红袍，脚上还带着小轮子！一帮小孩子全穿着绿绸衣裤，头戴蛤壳形的草帽，拉着这位会出风头，而不会走路的开路鬼。小坡看着这群孩子，他嘴里直出水，哈！我也去拉着那个大鬼，多么有趣哟！

开路鬼后面，一排极瘦极脏的人们，都扛着大纸灯，灯上罩着一层黄麻。小坡很替这群瘦人难过，看那个瘦老头子，眼看着就被大灯给压倒了！

这群瘦灯鬼后面是一辆汽车，上面坐着几个人，有的吹唢呐，有的打铜锣，有的打鼓。吹唢呐的，腮梆儿凸起，像个油光光的葫芦。打锣的把身子探在车外，一边笑，一边当当地连敲，非常得意。小坡恨不得一下子跳上车去，当当地打一阵铜锣！

汽车后面又是一大群人，一人扛着一块绸子，有的浅粉，有的淡黄，有的深蓝，有的葱心儿绿，上面都安着金字，或是黑绒剪的字。还有一些长白绸子条。上面的字更多。小坡想不出这都是干什么的，而且一点“看头儿”也没有。把大块很好的绸子满街上摆着，糟蹋东西！拿几块黑板写上几个“7”，或是画上两只小兔，岂不比这个省钱！小坡替人家想主意。也别说，大概这许是绸缎店的广告队？对了，电影院，香烟庄都时常找些人，背着广告满街走，难道不许人家绸缎铺也这么办吗！小坡你糊涂！小坡颇后悔他的黑板代替绸子的计划。

啊，好了！绸子队过去了！又是一车奏乐的，全是印度人。他们是一律白衣白裙，身上斜披大红带，带子上有些绣金的中国字。小坡认不清那是什么字，过去问老印度。老印度摇头，大概也不认识。

“不认识字，你们倒是吹喇叭呀！”小坡说。

印度们不理他，只抱着洋喇叭洋号，仰头看着天。

汽车后面有一个打白旗的，襟上带着一朵花儿，一个小红缎条，小坡不知道这个人又是干什么的。只见他每一举旗的时候，前面的绸子队便把绸子扛得直溜一点，好像大家的眼睛全往后了着他似的。有的时候，他还骂街，骂得很花哨，前面的绸子队也不敢还言。小坡心里说：这个人一定是绸缎庄的老板，不然，他怎么这样威风呢。

后面又是一辆没篷的汽车，车里坐着个老和尚，闭着眼一动也不动。小坡心里说：“这必定是那位死人了！”继而一看，这位老和尚的手儿一抬，往嘴送了一牙橘子。小坡明白了，这不是死人，不过装死罢了。他走过去把住车沿，问：“橘子酸不酸呀？”老和尚依然一动也不动。小坡没留神，车前面原来还有两个小和尚呢。他们都是光头未戴帽，脑袋晒得花花地流油。他们手打问心，齐声“呸”了小坡一口。小坡瞪了他一眼，说：

“操场后面见！”

小和尚们不懂，依旧打着问心，脑袋上花花地往下流油。

这辆后边，还有一车和尚，都戴黑僧帽，穿着蓝法衣，可是法衣上有许多口袋，和洋服一样。他们都嘟囔着，好像是背书。小坡想出来了：前面的老和尚一定是先生，闭着眼听他们背书，不知道背错了挨打不挨？

这车背书的和尚后面，又有一辆大汽车，拉着一大堆芭蕉扇儿，和几桶冰水，还有些大小纸包，大概是点心之类，两个戴着比雨伞还大的草帽的，

挑着水桶，到车旁来灌水，然后挑去给人们喝。小坡过去，欠着脚看了看车中的东西。“嗨！还有那么些瓶子拧檬水呢！”

“拿一把！”驶车的说。

小坡看前后没人，当然这是对他说了，于是拿了一把芭蕉扇，遮着脑袋。还跟着车走，两个挑水的又回来灌水，小坡搭讪着喝了碗冰水，他们也没向他要钱。哼，舒服多了，冰水喝了，头上还有芭蕉扇遮去阳光，这倒不坏！天天遇见送葬的，岂不天天可以白喝冰水？哼！也许来瓶柠檬水呢！还跟着车走，希望驶车的再说：“拿一把！”岂不可以再拿一把芭蕉扇，给妹妹拿回去。可是驶车的不再言语了。后面咚咚地打起鼓来，不得已，只好退到路旁，去看后面还有什么好玩的事儿。

嗨！又是一车印度。全是白衣，红裙，大花包头。不得了，还有一车呢，不得了，还有一车呢！三车印度一齐吹打起来，可是你吹你的，我打我的，谁也不管谁，很热闹，真的，但是无论如何不像音乐。

小坡过去，乘着打鼓的没留神，用拳头捶了鼓皮一下，捶得很响。打鼓的印度也不管，因为三队齐吹，谁也听不出错儿来。小坡细一看，哈！有两个印度只举着喇叭，在嘴上比画着，可是不吹。小坡过去戳了他们的脚心一下，两人激灵的一下子，全赶快吹起来。小坡很得意，这一戳会这么有灵验。

三车印度之后，有两排穿黄绸衣裤的小孩，一人拿着个纸人儿。纸人的衣裳很漂亮，可惜脸上太白，而且脑袋全左右前后乱转。小坡也试着转，哼，怎么也把脸转不到后面去。用手使力搬着，也不行！算了吧，把脸转到后面去，万一转不回来，走路的时候可有点麻烦！

纸人队后面，更有趣了，一群小孩头上套着大鬼脸，一路乱跳！有一个跳着跳着，没留神，踩上一块香蕉皮，大爬虎似的倒在地上，把鬼脸的鼻子摔下一块去。哎，戴鬼脸到底有好处，省得摔自己的鼻子！

又是辆大汽车，上边扎起一座松亭。亭上挂满了花圈，有的用鲜花做的，有的用纸花做的。小坡纳闷：这些圈儿是干什么的呢？花圈中间，有一张大相片，是个乌漆巴黑的瘪嘴老太太。小坡又不明白了：这张相片和出葬有什么关系呢？摆出来叫大家看？一点不好看哪！不明白，死人的事儿反正与活人不同，不用管，看着吧！

啊哈！更有趣了！七八十，至少七八十人，都是黑衣黑裤，光着脚。一人手中一条白布带，拉着一辆老大老大的汽车。一个老印度驾车，可是这群人假装往前拉。小坡笑起来了：假如老印度一犯坏主意，往前忽然一赶车，这群黑衣人岂不一串跌下去，正像那天我们开火车玩，跌在花园中一样？那多么有趣！小坡跺着脚，向老印度打手势，低声而恳切地说：“开呀！往前开呀！”老印度偏不使劲开。“这个老黑鸟！糊涂！不懂得事！”

车上扎着一座彩亭，亭中放着一个长方形的东西，盖着红绸子，看不出到底是什么。亭上还站着一对小孩，穿着彩衣，可是光着头，晒得已经半死了。小坡心里说：大概这两个小孩就是死人。虽然还没死，可是等走到野外，也就差不多了！多么可怜！

车后面有四五个穿麻衣，麻帽，麻鞋的，全假装往前推着汽车。他们全低着头，可是确是彼此谈笑着，好像这样推车走很好玩似的。他们的麻衣和林老板的夏布大衫一样长。可是里边都是白帆布洋服。有一个年纪轻的，还系着根红领带，从麻衣的圆大领上露出来。

这群人后面，汽车马车可多了！一辆跟着一辆，一辆跟着一辆，简直的没有完啦！车中都坐着大姑娘，小媳妇，老太太，小姐儿，有的穿麻衣，有的穿西装，有的梳高髻，有的剪着发，有的红着眼圈，有的说说笑笑，有的吸着香烟，有的吃着瓜子，小姐儿是一律吃着洋糖，水果，路上都扔满了果皮！嗨！好不热闹！

小坡跟着走，忽然跑到前面看印度吹喇叭，忽然跑到后边看小孩儿们跳鬼。越看越爱看，简直的舍不得回学校了！回去吧？再看一会儿！该回去了？可是老印度又奏起乐来！

走着走着，心中一动，快到小坡了！哎呀，万一叫父亲看见，那还了得！父亲一定在国货店门外看热闹，一定！快往回跑吧！等等。等他们都走过去，“再向后转走！”拿着芭蕉扇立在路旁，等一队一队都走过去，他才一步一回头地往回走。

“到底没看见死人在那儿装着！”他低着头想，“不能藏在乐队的车上！也不是那个老和尚！在哪儿呢？也许藏在开路大鬼的身里？说不清！”

“无论怎样吧，出殡的比什么都热闹好玩。回家找南星们去，跟他们做出殡玩，真不错！”

(『中国名家经典童话—老舍选集』 同心出版社，北京，2009，pp. 81-91,.)

